
今日のために

いりあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日のために

【Nコード】

N3403F

【作者名】

いりあ

【あらすじ】

少し違い、少し先のお話。国民の中から数少ない『選ばれた』子供たちは今日を生き明日を生きるため戦う。

TEST:FILE1(前書き)

おそらく、かなり設定に無理があるかと思いますがよろしくおねがいします。

TEST:FILE 1

「寒い・・・」

崖の上に小さな体の少年がそこにうずくまっていた。鎧——というよりは私服のままに、装着された装備のようなものが肩や腕、膝などに付いている。履いている靴を横に向けてスイッチをいれたのち、ギアのようなものを回している。

「ん。」

隣にはその少年よりもまた小柄な少女が凜と立っていた。こちらも装備をしているが、少年のものよりも体を守っている範囲が広く、足は全体を覆い、肩と腕の装備がつながっている。背中になにか布で包まれたモノをもっているが、完全に覆われ何かわからない。こちらは双眼鏡をのぞき、何かを確認しているようである。

「・・・トリオ、約12km、およそ50km/時、ホバーの車。残り14分後程で接触。」

少女が呟いた。しかし、周りが静かなせいか、または少年の聴力がいいのか、少年はきちんと聞き逃さずに応答した。

「了解。これで最後の組だといいな・・・」

次の瞬間、少年の靴からジェットのようなものが下向きに一度噴射一瞬、少年の体が少し浮いた。そのあとは「リノちゃんだねやっぱ」などといいながらギアを回している。よくわからないが、どうやらジェットの大きさを調節しているようだ。

「早すぎてもだめだしなあ、トップよりちょっと前ぐらい。緊急回避用だから調整もそんなにしてくれないしね。よし。」

そう言い終えると少年は立ち上がった。

「ん。」

少女が声をかけ肉眼だと米粒のような小ささにしか見えないものに指をさす。

「ああ、俺にも見えるようになってきた。まあ位置的には、俺たち

有利だね。援護よろしく。」

無言でうなずく少女を見て、少年は一度笑った。

瓦礫の山を見ると思い出す、第三次世界大戦。大変だったらしいね。ロシアは攻めてくるし。

2029年、ロシアが水爆を秘密裏に開発、所持していたため国際連合が開発禁止勧告を発した。しかし開発をやめなかったため、主にドイツ、イタリア、大日本から構成されていた国際連合から外され、その後、第三次世界大戦が開戦。それに乗り、腹いせに大日本帝国を攻撃。近いからって、していいことと悪いことがあるって。

ついには水爆を北海道から落としていつちゃったから北海道の約半分が瓦礫に埋もれた。政府はあせって北海道、東北地方の住民に南下命令をだした。案の定ロシアは山形あたりまで計三発の水爆を落とした。今のところ、元北海道と東北の三分の二は瓦礫の山。もともと日本は人口密度が低かったらしいから、建物の再生よりは、逃げ延びた人の支援にお金を当てたらしい。そのときに北海道と東北の三分の二は領土としては放棄。その境界に東北危険区域境界基地を設置し、東北地方を横断するように壁を作り、あたりを監視しているらしい。そのとき使われた水爆は・・・なんだっけ。ツアーリなんとかだった気がする。

そしてこちらは先ほどの少年。二人目までは順調だったのになあ、と呟きながらきよるきよるしている。あれから何人かと交戦したが、後方支援のようだった三人目が逃げたのである。ま、あの少女がやってくれるかなと思い、その辺の瓦礫に寝転ぶことにする

ちなみにこのあたりは・・・元岩手だったかな？こんな地名学校ではもう習わないはず。

む、銃声が聞こえる、あっちだね。

「む、いたいた。おっと。」

足元の瓦礫が崩れ、はまりそうになる。

数分とかからず見つけれた少女は、同じぐらいの歳の少年に鉄の塊でできた筒を向けていた。小さな手で支えられている筒から出た一筋の弾丸が少女と同じ大きさぐらいのかつての人に当たる。鈍い音を鳴らして当たった弾は、瞬間に当たった小さな「物」を浮かし、腹を少し抉り取った。その弾は次の瞬間に、光とともに霧散し、当たった小さな体は腹の一部を赤く濡らし、そこに倒れこんだ。

「・・・ま、こんなもんみたいだね。」

悲しげにいう少年の姿に、無言でうなづく隣の少女。——こっちにこなけりやこいつらも生きてたのにな。

「速いに越したことはないね・・・これで姉貴にも怒られずにすむよ。」

半ば呆れたように少年が言った。

「ん。」

少女が相槌のようなものをうつた。

じゃ、帰りますか・・・少年がそういうが速いか、二人は歩き出していた。

「ねえ、新島君。起きてもらっていいかしら？」

なんか聞こえる。俺は今、前の戦闘の優雅な働きを本能的に思い出してたんですけど、邪魔しないで。

って駄目だ。回想シーンに戻れない。

「うあ？もちよつと寝ちゃだめかな？」

眠気眼で「後五分」みたいなこと言われても教師としてはオッケーしがたいところがあるらしく、頭を教科書でたたくという反撃をしてきた。教科書を粗末に扱っていいのですか！

「いいわけないでしょ。前者は授業中なんだけど。後者はあなたを起こすためのもの。あと、かつこいいショートの黒髪がはだけてるわよ。」

む、現状把握。お世辞は無視。歴史嫌い、おやすみなさい。数学でしかおきない主義です。

「把握したのに中学二年、新学期早々寝ないでくれる？新島君。」あれ。こっちの文読めるんですか？沖先生。いままで西城しか読めないと思ってたんですけど。

「あなたはそっちの文とやらを口に出す癖があるわ。よくわからないけど直したほうがいいわよ。顔はいいのにダラケと抜けてる性格がだめねえ。」

む、そんなことしてたんだ。自重しないと心の中がまるわかりじゃないか。気を取り直し。

「え、そうだったんですか？じゃあ地の文だと思わないようにします。」

ますますわからないわね・・・などと呟き、沖先生が教卓に戻る。俺なんかしたつけ？眠いからだめだ。

「まあいいわ、続けるわよ。」

まあいいや。あんまし気にしてないし。・・・ぐう。

「・・・そういうわけで大東亜戦争終結へ向かったわけよ。はい、授業終了。」

次はチャイムに起こされる。一回目の起こされた後の記憶がない。また寝たのかな。

沖先生がてきばきと開いていた教科書を片付け「次は二の三ね。」などといいながら早足に教室を出て行く。

あ、結局授業聞いてなかった。まあ大東亜戦争周辺は大丈夫。寝よ。

余談だが、授業の10%ぐらいが俺を起こすのに費やしてしまったらしく、あとでクラスメイトに褒められた。

あれ、なんか肩につんつんしてくる女の子がいる。眠いんだよ、寝かしてくれないかな。

「ん。」

俺は残念ながら寝るので忙しい。新学期の委員は適当に参加させていてよ。委員長と副委員長以外でお願い。

「・・・放課後。」

「んあ？・・・ああ。」

頭の覚めたあたりでがばっとおきてみる。女の子・・・西城の肩ぐらいまでのセミショートが目端に移る。まだ瞳孔あわね。よし確認だ。身体は、特に問題なし。精神は、元からアレだからいいや。立ち上がって思う。西城、同い年のはずなのにやっぱり背が低いなあ・・・見下ろす感じになる。

授業もすべて終わって、掃除が終わって一眠り。とおもったら・・・なんかすごい寝た気がするよ。

「・・・今何時？」

「ん。」

西城の指差した方向、時計を見ると午後6時ちよいすぎ。部活も終わってるじゃない。部活動なんか参加してないけど。

「あの、西城さん。何で起こしてくれなかったの？」

「・・・ん。」

まあ、予想の範囲内。まともな返答は帰ってこない。というより読めない。すべてを「ん。」で伝えられても困る。まあ爆睡していた俺への配慮だろう・・・とおもう。

「・・・俺を起こすのもしかして嫌かなあ。寝起きは悪くないつもりなんだけど。」

苦笑しつつ呟く。まあ西城には聞こえないように配慮したし、きこえてないでしょ。

「じゃ、いこっか。」

少し笑って、無言でうなずく西城、なんかうれしそう。

学校から磁浮式リニアの駅まで徒歩10分ぐらい。西城と放課後行くところ一緒だし、まあ一緒にいつも学校を出るわけだ。学校から駅

までもビル、ビル、ビル、ビル。なんか・・・ビルだね。

大東亜戦争が終結してから、大日本帝国はまあそりゃあ発展の一路を極めたらしい。2079年の今となつちや遠い昔の話だけど。1943年9月の米英同時降参直前は原爆、水爆、時潮爆・・・とまあ当時のアメリカあたりがもっていた兵器は「三爆」と呼ばれるくらいすごかったらしい。そのときのアメリカは繁栄を極めてる。廃棄しなけりや勝つてたのに。よほど危険な兵器だったのかな。せめて使ってから廃棄すればよかったのに。

まあ勝利国の国民が言えた義理じゃないね。

『県庁前。県庁前。左側のドア、開きます』

「・・・着いた。」

あう、西城、起こしてくれてありがと。あ、ここで磁浮式リニア降りないかね。パイルオーダーどこいったっけ・・・ん？なんか人ばかりができてる。

「通れないのだ・・・」

その中心には女の人がいた。

あの女の人、何やってるんだろ。改札の前でうろつろしてる。俺たちより年下かな？

「なんかほつとけないなあ。」

む、悪い癖発動。一回何かが心配になるともう心配で心配で。だから姉貴にもお人よしってことで使われるんだよね。あ、改札にはさまれた。

「・・・ん。」

西城が背中を押してくれたし、しゃあない。行きますか。

近くで見るとすばらしい。改札って離れると開き、パイルの認証し

ないで通ろうとすると閉まる。だから離れてあいた隙に通り抜けようとする。すると閉まる。そののループ。女の人、の長髪がなびいてまたストップ。

「仕方がない。最終兵器、いつくぞー！」

・・・・ちよいとまち、スタンディングスタートで最終兵器って何を行くつもりなのさ。あと恥ずかしくないの？

「ふう・・・とりやああ・・・！」

待つて待つて、閉まる前に通り過ぎるつもり？それとも飛び越えるのかな。悪くないけど、えらく原始的な発想だね。感心する前に止めるけど・・・間に合うかな。

仕方ない・・・あの人が走り出したと同時にカウントスタートしようか。足のホバーのスイッチは、入ってるね。ギアセカンド。トゥブだと止まらなさそう。

女の人、が走り始めた瞬間、瑠嘉の足の後ろ、辺りからジェットのようなものが噴射、瑠嘉は

改札前に滑り込んだ。

「ちよつと・・・目の前にきちゃ危ないのだ！」

素早く改札と女の人、の間にはいつて女の人、を抱きとめる。思ったよりも衝撃が強い。

——うし、キャッチ完了。

あら、勢いでしりもちついちゃった。ここ、邪魔になっちゃうな。

「ちよつと、改札の仕組みも知らないの？つと・・・むふ。」

聞くのが早いか抱き返された。あれ？俺、改札の仕組み聞いたはずなのに抱き返されたのはなぜだろう。

しかも、なぜだか周りの人の注目はいまだ外れない。

「んふふー。抱きとめられちゃった。」

む・・・顔を赤らめてどうしたんだろう。どんな勘違いをしたのやら・・・こつちもちよつと赤くなっちゃった。と、とりあえず駅

員に引き渡すしかないかな。

「ん。」

いつの間にか隣にいた西城が右手でつんつんしてくる。

「なに？西城。」

西城が左手で指差す先を見る。ん、なんか落ちてる。抱きとめたときに落ちたのかな。カード？真つ白だったので裏返してみた。

「ん、これは・・・」

W H Cのエントリーカード？この子もしかして・・・

うつむ、困ったことになった。多分、新しく「こつち側」になった人かな。

「さて・・・どうするかなあ・・・」

まあ、こんなカード見てしまつては、あとは決まつてるんだけどね。西城なら、もうわかつてるだろうなあ。

「西城は別にそれでもいい？」

「ん。」

うなずいてくれた。本部まで連れて行きますか。駅員にどう説明するかなあ・・・

「はいはい見世物じゃないよ。どつかいった。」

とりあえず邪魔なので呼びかけてみると皆、我に返つたのかとりあえず人だかりは解消してきた。とりあえず、状況の説明。

「俺たちも同業者っぽいからさ。この地区の本部までつれてくよ。」

とりあえず、それしかないよね。ほかにいい方法が思いつかない。

「んふ、ドウギョウシャ？よくわかんないけど改札が通れないし、案内してくれるならお願いするのだ。」

よしよし、聞き分けのいい人だ。

「ん、了解した。えつと・・・」

そついや名前聞いてなかったね。

「桜華。神林桜華。神様に林に桜に華宵の華。14歳だよ。」

同年年？なんだか年下みたいナリに言動だね。・・・いてっ。

「俺は、新島瑠嘉。新しいに山なしの島。瑠璃の瑠に嘉藤の嘉。14歳。嘉がわかりにくいけど漢字で呼ぶこともないでしょ。」

一応紹介を終え、西城に促す。

「西城、弓。西の城、撃つ弓。同じく14歳。」

「んふ、よろしくね。」

手を差し出してきた。うむ、よろしくね。

「ところで桜華ちゃん。」

「桜華でいいよ。」

ん、じゃあ桜華で。

「パイルオダーって持つてる？こんなの。」

自分の物を取り出して、見せてみる。

「パイルオダー？それって携帯かな。それならかばんの中に確か。」

ごそごそとかばんを手で探り小型の折りたたみ式の携帯機械を取り出す。……あるんじゃない。何で使わないのさ……もしかして

「……改札とそれ、使い方わかってない？」

はっと考えたが却下した案を、掘り起こして恐る恐る聞いてみた。

まあ顔を見れば帰ってくる言葉は100%わかる。

「うむ！」

そんなに胸張られても返しようがないんですが。

「初耳だ……この時代に磁浮式リニア使ったことないって……」

「む……まあいろいろあって、あの磁浮式リニアとやらを使うのは今日がはじめてなのだ。」

何故か複雑そうな顔をする。ま、桜華になにがあつたって知ったことじゃないさ。

「ふむ、相当田舎者と見た。」

「うがー、誰が田舎者だ！。携帯だって圏外じゃないんだぞ？」

携帯ってパイルオダーのことだっけ。パイルオダーが圏外ってかなり問題な気がする。昔は圏外もあつたらしいけど、今となっては電波が届かないところなんてないし、電話に困ることはなくなつたし。ん……さっきから気になってるんだけど、「携帯」って？今の時

代パイロダーを携帯って呼ぶ人そういないぞ。希少だぞ。昔はそう呼んでいた人もいたけどそんな呼び方、機装軍の訓練生のときに座学でしか学ばなかった気がする。わ、やなこと思い出しそうになった。

や、やめて。俺にはそれは撃てない！あ、うああああ・・・！

「・・・ん。」

うあつ。なんか、ありがと、西城。なんか今ジャングルな世界にいたよ今。

「はあはあ・・・ふう・・・」

桜華が心配そうな目で見つめてくる。大丈夫、大丈夫。

とにかく、そんな使い方知っている人もいないんじゃないかな。携帯って辞書で引いたら動詞での使い方しか出てこない気がする。「携帯する」みたいな。

まあ携帯なんていう一世代前の言葉を使う物好きも現にいるさ。あんまり気にしないでおう。

「仕方ない・・・パイロダーの使い方、教えてあげるよ。」

「ありがとー。んふ、やつさしー。」

む、顔が近いんですか？

「照れるやい。褒めるな、褒めるな。」

あら、西城俯き気味だ？そういえばさつきから立ちっぱなし。疲れがたまってるのかな。どこかに座らないと疲れる。

とりあえず駅員に事情を説明し、改札そばのベンチでパイロダーの講習を十分ぐらいで終わらせることにした。

「あ、リニアモーターカーの説明は必要？」

「・・・ごめん、頼めるかな？」

ふむ、わけありの様子。二十分になりそうだけど、説明に入りましょう。

「あ、西城、間違ってたら指摘して。」

「ん。」

いい返事です。

「さっき磁浮式リニアっていったのは磁力の反発、吸引力に浮いて、リニアモーターで駆動する自動車両の総称だっけかな。磁力浮上式リニアモーターカー、略してリニア。推進にはリニアモーターが使われて、高速化ができるんだ。まあ、ここにいてるってことは桜華も乗ったはず。」

「あれ、リニアモーターカーって磁石で浮くやつのことだけじゃないの？磁浮式ってつくぐらいだし。」

「むう、頭が悪いわけではないみたい。それにしても何でこの人、こんなに世間知らずなんだろう。リニアモーターカー＝磁力浮上式リニアって21世紀始まってすぐぐらいの発想じゃないかな。」

「うん、リニアモーターカーでも全部地面に浮いているわけじゃない。リニアモーターを使えば全部リニアモーターカーだよ。」

疑問符を頭に浮かべて聞いてくる。

「リニアモーターって仕組みどんなの？」

「む、説明しきれるかな、ちょっと不安。うう、風が少し寒い。」

「ロータモーターってわかる？回転運動の。」

「うん。あのミニ四駆とかに使ってたやつでしょ？」

「ミニ四駆？」

「なんだろそれ。」

「え、もうタミヤ、ないんだ・・・」

よくわからないけど悲しそう。タミヤって人の名前かな。

「ん、続けていい？」

「・・・んふ、ごめん。いいよ。」

明るい表情に戻った。何でかわかんないけど、桜華の悲しい顔はあんまり見たくないな。

「要するにモーターは回転運動。リニアは直線運動。といってもみんな原理知ってるわけじゃないし。直線運動ってなにって聞かれても一概にはこたえられないよ。ただ、直線運動ってだけ。」

「なるほど。それがリニアモーター、と。」

ふむ、やっぱり頭はいいみたい。助かる。

「それでね、ちよつとこつちきて。その改札のマークわかる？このパイルオダーに似た感じの紋章が写されたマーク。」

少し場所を移動するため立つ。いまならダイヤの合間だし見れる。

「んふ、これ？」

独特の口調が入る。「んふ」は口癖みたい。

「そうそう。そこにパイルオダーを近づけると、料金が払われるつてわけ。俺たちの場合、国に金は持つてもらってるんだけどね。」

「ダブリュ・・・エイチキュー？」

何だそれといわんばかりの口調で返してくる。もしかして、何も知らない？

「ねえ、桜華つてどこから来たの？」

何気なく聞いてみたけど、返ってきた答えに驚愕した。

「・・・そういえば、ここどこだろう。なんか起きて、よくわからない真つ白な部屋にいたからとりあえずその辺に転がってた荷物もつて出てきたけど・・・」

絶句。夢遊病？にしては意識がはつきりしてるか。駄目だ。考えてもわからない。

「西城、どういうことになってるか、わかる？」

「・・・仮定の段階。」

うーむ、珍しく的確な答えが返ってこない。

「とりあえず、君が行くべきところと思われる場所までエスコートします。」

「了解なのだ。」

少し歩くと、桜華が何かを呟いた。

「・・・ぼりだな。」

ん、はじめのほうが聞こえなかった。西城もよく聞こえなかったら

しく首をかしげている。

「ん、なんかいった？はじめのほうがかきこえなかった。」

「・・・んふ、なんでもないよー。ありがとね。今からも本部とやらまでエスコートされちゃいますが、よろしくー。」

ん、まあいろいろ気になるけど、了解とだけ答えるとするかな。

TEST:FILE1(後書き)

最後までありがとうございます。

ひとつの世界（前書き）

おそらく、設定にかなり無理があると思いますが、ヨロシクお願いします

ひとつの世界

「到着だよ。」

ここは機装軍兵庫県本部。地下に巨大な円錐型空間を作ってそのまま本部にしたらしい。なんか、考え方が原始的というか・・・なんというか。

「大きいー！丸いー！円錐なのだー！」

「六時四十五分か・・・」

とりあえず受付の梨乃ちゃんあたりに桜華の認証をしてもらわないと。考えたくないけど、敵の可能性も否定できないし。西城なんか一応武器に手をかけてる。

入り口から受付まで、直進すればつくけど、40mぐらいある。この空間、広いよなあ。

「・・・新島様、こんばんは。後ろの方は、どちら様でしょうか。知らない方の方なのですが・・・」

少し敵対的というか、警戒している節が見える。

「や、伊里梨乃ちゃん。おつかれさまー。いやね、桜華って言うらしくて、磁浮式リニアの改札で右往左往しているところを拾ったのね。それでW H Cのエントリーカード落としたから同業者っぽいって。ただ本人、なんか、よくわからない状態というか・・・そこでここまでエスコート。」

納得したようで、S Pのキーボードをカタカタと鳴らしている。

「なるほど。最後のほうの要領を得ませんが、わかる気もします。それでしたら・・・まずW H C一覽と照明するため指紋認証を行います。ここに手を置いてください。」

よし、とりあえず信用してくれた。よかった。

「うん、うん！」

何故か桜華が目キラキラさせながら手を置く。もしかして、指紋認証好きなのかな。もしそうなら変な人の称号が与えれそう。同じ

ことをおもったらしく西城も梨乃ちゃんも不思議なものを見る目をして何か聞きたがっている。

「・・・FRS、珍しい？」

西城が痺れを切らして聞く。そしたら桜華はこっちを向いた。

「FRS？ねえ瑠嘉あ。FRSってなに。」

・・・なに？FRSをしらない？

「ちよつと待つて。FRSを知らないの？」

「うむ！」

「・・・ん。」

「・・・これは一体どういうことですか、新島様。」

ごめん梨乃ちゃん、俺にもわかってないんだ。

とりあえず梨乃ちゃんにさっきまでの出来事を簡略化して説明した。ここまでくると世間知らずも重症だ。西城でさえちよつとびっくりしてる。磁浮式リニアといい、FRSといい、パイルオーダーといい、あとなんたる、この桜華から出る意味のない自信というか威張る才ーラというか。

「指紋認証システムの略だよ。Finger・・・西城、なんだっけ。」

「・・・Finger print recognition system。」

発音完璧、アクセントも申し分なし。凜とした声が少し響く。

「・・・だそうだよ、桜華。」

「んふ。弓、すごいのだ！なんかかつこいい！発音が！」

そんなことないといわんばかりに顔を赤くして横に振り謙遜する西城に褒めちぎる桜華・・・一体何をやってるのやら。ま、照れる珍しい西城が見ただけで個人的にはよしとしよう。

西城と桜華が少し遠くでじゃれてるあいだに梨乃ちゃんと話をする。
「梨乃ちゃん、出た？」

「今出ました。読み上げます。」

名前：神林桜華^{かんばやしあづか}

年齢：14

機装：速特化

住所：（機密）

履歴：抹消済み

その他も重要書類は抹消済みがほとんどです。」

「・・・なにこれ。ほとんどわかんないじゃない。」

俺が画面を見ながら困惑して言う。まあそれはあっちも同じみたいで複雑な顔をして応答してきた。

「もつとおかしいのが・・・このデータ、更新された日にちが2064年、十月十日なんです。」

「・・・うそでしょ。」

2064年、十月十日つていたら国が正式に『WHC適正検査』を始めた日にちだ。その日に登録されたって言うことは、すなわち桜華が生まれる前からWHCであることはわかっていたはずである。なんで・・・？

まあ、今考えても仕方がない。後でゆっくり相談だ。

「・・・梨乃ちゃん、後で話があるから、今日のお仕事終わったら、ちよつと待っててもらっていい？」

「わかりました。作業ノルマを達成して暇になったら、四階の喫茶層で待ってます。」

すると、さっきまで西城と戯れていた桜華がなんだか困惑した感じだよってきた。

「なにか、不都合でもあったー？」

「いや、そういうわけじゃないんだけど、桜華についてはこっちでもあまりわからなかった。知ってる限りの自分の情報、いえる？」

うそを一応ついておく。これは、もしかしたら迂闊に信用できない。自信ありげに答える桜華。

「んふ、了解！えっと、名前はさっき言ったでしょ。年齢は一応・

・14。住むところはこらしいのだ。」

む、俺たちと同じ住所か。桜華は続ける。

「機装ってゆーのはさっき梨乃・・・あ、呼び捨てでいい？」

うなずく梨乃ちゃん、俺も呼び捨てで行こうかな。親密感あるし。

「機装ってゆーのは、梨乃が言ったとおり、速特化みたい。」

ん、「みたい」・・・？確認したの最近なのか、今なのか。

「えっと、ついさっきパイルオダーの右上みたら、『機装：速特化』
って書かれてたから

そっかって。んでさ、この、機装って何？」

ちよつとまで・・・ここまでくると少し警戒しないとイケないな。

機装は近代の主要武器のひとつだよ。ちっちゃな子供でもおもちゃ
とかで知ってる。それを、「何？」とな。冗談きつい。

「機装を・・・知らないってどういうことなのさ？」

「ふへ？」

むう、悪意はないんだけど、よくわからない恐怖を覚える。一体い
ままでどんな生活をしてきたんだろう。西城なんかもう絶句してる。

「理解ができなくなってきました。機装を知らないのにW H C、で
すか。」

梨乃ちゃん、本当に困ったみたい。大丈夫、俺も困ってる。

「そっいえばさっき瑠嘉もW H QとかW H Cとかいってたのだ。ね
えねえ弓、それってなに？」

西城とはもう下の名前か。馴染みやすい人だなあ。

「・・・W H Cは、World Holiness Childrenの略・・・公式訳は世界の神聖な子供たち。W H QはWorld Holiness Quenchersの略・・・公式訳、世界を神聖に抑制する人たち。」

西城がたんだんと続ける。今度聞きたいんだけど、もしかして人間
辞書か何かな？そう思いつつ俺が続ける。

「で、機装って言うのは、第三次世界大戦中にドイツが最初に試作
品を戦場に投入したところ、すごい働きをした人型専用装着装備の

総称でね。肩、腕、膝、足、頭など、つけるところは様々に分かれる。中には肩から腕にかけて装着するものがあつたり、腕自体に装備する武器があつたりするんだ。総称して、機装って呼んでるんだよ。ちなみに今のところ大日本帝国では、公式の大日本機装軍しかもってない。」

「・・・大日本帝国、とな？」

桜華が真顔で聞いてくる。いや、さすがに国名を知らないということはないだろうと思い、うなずきを返しておく。そして続ける。

「その機装軍の中でも機装と相性がいい子供がW H C。まあとりあえず俺、西城、梨乃ちゃんはW H C。それで、W H QっていうのはW H Cで作ったグループみたいなもの。」

「相性？」

む、そこを説明すると長くなるから今は説明できないな。

「そつか。じゃ、またこんどでね。それで、ここがさっき言ってた兵庫県本部、と。」

「・・・ん。」

西城がうなずく。

「・・・なるほど。機装ってさ、ソニックダイバーみたいなかんじ？」

「ソニックダイバー・・・？」

わかんないけど多分、あってる。

「むう・・・音羽ちゃん、知らない？」

「残念ながら知らないなあ・・・」

なんだか残念そう。タミヤとかいう人の話をしたときもあんな顔してたね。

「まあとりあえず、このカードを持って、ここにデータが少ないながらあるってことは、君はこれから俺たちの仲間だ。」

「もしかして、私も機装を装備して戦う？」

目を輝かせて聞いてくる。戦うってそんなに興味あるのかな・・・夢は壊しちゃ駄目だよ。今のうちは興味を持ってもらおう。

「うん、そういうことになるね。ま、君にとっては突拍子もないことでもデータがあるってことは前から決まってたってこと。とりあえず、自分は軽度の記憶障害だと認識してなさい。」

「はい。」

「なにげに新島様、急なことでもちゃんと対応してますね。」

「……ん。」

なんか後ろで言ってるけどいいや。褒めてくれてるんでしょ。

「機装……実物、見れる？」

「んー、俺今日はなんか、東北地方の味方が押されてるらしいから援護行かなきゃいけないくて、珍しく時間ないから、明日でいい？」

「んふ、別にオツケーなのだ。」

よしよし、いい子じゃないか。って、同年代なんだっけ、なんか頭をなでてしまう。

「そつだ。梨乃ちゃん、俺たちが行った後、暇なら桜華に本部内部の案内頼める？」

「……わかりました、少し不安ですが。しかし、身体検査が先では？」

そののあとでいいからさ。あと大丈夫、仮にも訓練兵時代があった身でしように。アイコンタクト送信。

「……ですね。了解です。」

「お、わかってくれた。じゃ、書類はいつもどおりで。」

「了解です。新島瑠嘉、西城弓でペア。機装は新島様は庄の大鎌。

西城様は速の銃でよろしいですね？」

桜華は頭の上にクエスチョンを浮かべている。あとで梨乃ちゃんは質問攻めに合うね、これは。ご愁傷様。

すらすらと手馴れたように梨乃ちゃんはキーボードをたたく。なんか音で寝そう。

「うん、俺はいいよ。」

「・・・了解。」

ま、いつものこと。

「では、東北の危険区域境界基地まで連絡の伝達をしておき、新島様、西城様両方の機装を今からリニアを使い、一足先に届けておきます。・・・？すいません、ここでひとつ報告なのですが。」

ん、なんか問題発生？

「まあ、問題と言ったら問題なんですけど、東北に手違いで一人、茨城県本部からWHCが送られているとのことです。いまさら戻すのも面倒なのでそのまま活動させるみたいですが・・・。」

「要するにうまくやれ、ということだね。まあ、善処するよ。」

「・・・そういうことです。お願いします。」

SPのキーボードをたたきながら応答している。まあこの時点で一度に二つのことをしてるんだから当然か。

「了解だよ。じゃ、いこつか。」

「ん。」

少し歩き、エレベーターを使って地下一階まで降りる。磁力浮上式リニアモーターカーの駅が特別に設けられているからである。250キロメートルより遠いところで任務をする場合、ほとんどがここにある自動寝台車両を使う。とはいえこのままいつでも二時間ぐらい早く着くなあ・・・。

「あ、瑠嘉だー。」

む、この声は・・・

「騎由かつ!？」

「うん、のりよしだよー。」

体が先に動き、反射的に声のしたほうに身構える。ナメクジで懲りた。勘弁してください。

「あはは、人のデートの邪魔するほど僕も馬鹿じゃないよ。」

騎由が西城に軽くウィンクする。とても小六には見えないな。

「・・・・・・・・。」

西城が首を激しく横に振る。・・・あら、なんかちよつと傷ついた。そりゃ俺なんかとデートするよりは他の人のほうがいいよね。うつ・・・

「え、違うんだ。瑠嘉もかわいそうに。瑠嘉。そうだ、帰ってきたら一緒に遊園地についてあげるよ。」

「残念ながら年下の、しかも男には興味がないね。」

とりあえず軽くあしらっておこう。遊園地はあまり好きじゃない。

「じゃ、訓練施設は？」

あ、そういえば騎由もWHCか。

「そうだな、双剣の抜くスピードとか一分間につてる斬撃の回数のアップとかなら付き合ってやれるよ。」

嬉しそうになる騎由。俺である必要性がわからないけど、まあ仕方がない。

「わかったよ、付き合ってやる。」

「やったあ！じゃ、明日ね！」

ちよつと待て、そういうが早いか騎由は走って行ってしまった。迂闊にオツケーするんじゃないかったかも。

「ねえ、西城。明日だけ・・・暇かな。」

「・・・ん。」

顔を縦に二回、振ってくれた。

ひとつの世界（後書き）

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3403f/>

今日のために

2011年1月23日14時05分発行